

しらうをや灯の入る前の店に酌む 山田真砂年

「俳壇」五月号「光の中に」より

白魚はようやく寿が兆してきたところにだけ獲れる、
貴重なものである。透きとおった、俸げな姿が余計に
風流心を誘うのであろう。馴染みの店なのだろうか。
灯のともるのを待ちきれないで、まだ客の少ない店に
入り白魚を肴に酒を飲みはじめた。独りでは抱えきれ
ない寿ごとがあつたのか、珍しい人と出会った成りゆ
きで一緒に店に入ったのか。繊細な白魚が微妙な心の
うごきを想像させてくれる。